

# 鹿児島若年層話者方言のヨとガ\*

——ネオ方言の記述法を考える——

太 田 一 郎

キーワード：ヨ，ガ，鹿児島方言，文末詞，ネオ方言，対話，方言記述法

## はじめに

共通語化による方言変容の結果として、鹿児島方言では在来方言語形から共通語語形への大規模な置き換えが生じた (cf. 太田1998)。たしかに、語彙や文法項目の置き換えからは表面上は共通語化が進行したように見えるが、中には用法が共通語文法と完全に一致しないものもある。特に文末詞などを含むモダリティ的意味を担う文末表現の用法には、共通語と同じ語形を使用しながらも、地域方言の新しい特色が見られる。そして、方言語彙の共通語への置き換えの中で、生き残った在来方言語形は、新しく登場した語形とともに、方言の体系を再構築している姿が伺える。しかし、共通語化による方言変容をとらえてきた地域語研究においては、地域方言の動態全般に関わる研究報告は多いが、方言の体系的記述はまだほとんど行われていないのが現状である。本稿は、鹿児島のネオ方言を記述する試みの一部として文末詞ガとヨの分析記述を行うが、その際、「対話」を文末詞記述のための基本単位とみなし、特にネオ方言の記述のための方策として、文末詞の意味レベルをプロトタイプの意味と機能的意味に区別して記述することを提案する。

## 1. コーパス

本稿で検討する鹿児島方言の用例は、「鹿児島ネオ方言コーパス」(以下 KN

コーパス) から引用する。このコーパスは1997年7月から8月にかけて収集した鹿児島市内の大学生33人分の自然談話と筆者との面接談話から成る。このうち今回は8組17人分の自然談話データを使用する。各組の話者の構成と使用した分量(時間)は表1の通りである。

談話番号	話者 A	話者 B	話者 C	談話時間
M 1	女性	女性*	なし	30分
M10	女性*	女性	なし	30分
M12	女性*	男性*	なし	30分
M13	女性	男性*	なし	30分
M17	女性	男性*	なし	30分
M18	女性	女性	女性*	60分
M20	女性*	女性	なし	30分
M22	女性	男性*	なし	30分

表1 話者の構成  
(\*は鹿児島市出身)

## 2. 文末詞の意味・機能のとらえ方 —対話調整と談話管理—

### 2.1 先行研究

まず、具体的な分析に入る前に、最近の研究で文末詞がどのように位置づけられているかを検討し、本稿における文末詞分析のため視点を確定しておく。

#### 2.1.1 片桐(1997)

片桐は、対話を「動的変化」と「情報共有」という二つの特徴を持つものと考えている。すなわち、常に変化し、確実性が十分でない状況で、対話者たちは情報共有を何とか実現していくのが対話の姿であり、情報共有に貢献する発話の機能を「対話調整」と呼ぶ。対話調整に重要な機能を担うのは、特に対話に特徴的な言語様式(あいづち、言い直し、言い換えなど)だと考えられるが、情報の受け渡しの方策に関わる文末詞やイントネーションもこの中に含めることができる。つまり、これらの要素は命題的情報は伝えないが、話し手がその

情報をどのように受容しているかという補足の情報を発話に付加し、話し手と聞き手の間で行われる情報の共有を促す働きをされると考えられる。この説にしたがえば、文末詞の機能は情報共有のための対話調整と見なすことができると思われる。

### 2.1.2 金水・田窪 (1997)

金水・田窪の談話管理理論では、言語表現を表示する二つの心的領域（D-領域、I-領域）を仮定することが提案され、解釈機構に基づく文末詞の説明が行われている。D-領域は、対話の現場や長期記憶などからの直接経験情報が表示（格納）される知識データベース的領域、一方I-領域は、間接的に得られた情報や仮想的情報などの概念的知識が表示される領域である。彼らのモデルでは、コミュニケーションとは、「立証されていないI-領域の知識を、D-領域の知識に基づいて立証していく行動」（p.258）とみなされ、文末詞はこの立証の過程を対話者が相互に見せあう際の標識として位置づけられる。この観点から、文末詞ヨとネの対話における機能は、ネが「記憶領域内において命題を断定に導くために行う論理計算の過程にあることの表明」（P.264）、ヨが「情報をI-領域に記載し、関与する知識に付け加え、適切な推論を行えという標識」（田窪・金水1996：72）であると考えられている。

これら二つの理論的枠組みには、共同行為、解釈機構という視点の違いはあるが、基本的発想はよく似ており、排他的というよりもむしろ相補的と思われる。

## 2.2 本稿の立場

以上のようなモデルで文末詞の機能をとらえることには大きな利点が二つある。第一に、ひとつの語形がたくさんの意味を受け持つような辞書的記述を避けることができることである。文末詞の場合、その語彙的意味はほとんどなく、たとえば(1)のように、むしろ談話においてある種の機能を果たすと考える方が妥当である。

(1)a. 雨が降ってる

b. 雨が降ってるよ

(田窪・金水1996: 72)

田窪・金水は、(1) a は単なる事実認識にすぎないが、(1) b は状況に応じて様々な推論（傘を持って行きなさい、洗濯物を取り込んで、など）へとつながると述べている。つまり、文末詞を伴った発話の表面上の解釈（＝最終的に受け手が到達する意味、つまり警告、要請など）は、状況により導かれる語用論的推論によるものととらえるべきであり、文末詞そのものに内在するものではないことは明らかである。たとえば、白川（1992）などにも文末詞ヨの機能についての解説が見られるが、どちらかと言えば、ヨの機能の記述だけにとどまっております。言語記述のモデル内で十分な位置づけが行われているとは言い難い。それに比べて、上述の二つの先行研究は対話もしくは談話という視点からより明示的に文末詞の機能を提示してくれる。

また、文末詞類はいくつかの語形の間で部分的に意味の重複が見られるが、このような現象も文末詞各語形はそれぞれのプロトタイプの意味をもち、知識状態を表示する役割を担うと仮定すれば、最終的に聞き手が到達する意味カテゴリー（依頼、断定、要請など）は推論によって得られるものと考えられることができるようになる。結果的に得られた意味カテゴリーは同じものでも、推論の出発点のプロトタイプの意味が異なるかぎり、最終的な発話の意味にはいく分かの異なりが感じられるはずであり、上述の二つのモデルはこれらの差異を表す要因までも含めて説明できる。

二つ目の利点は、上述のモデルはどちらも話し手の知識状態を相手に知らせることと文末詞の機能を結びつけている点にある。すなわち、文末詞を使って自分の知識状態を知らせるということは、状況によっては相手に対してある種の行為（たとえば情報検証など）への協力の要請（cf. 田窪・金水1996: 72）を結果的に意味したり、様々な推論の導出へとつながる。文末詞が対話に特徴的な言語形式の一つだという事実は、お互いの知識状態を見せあいながら、未検証の知識を検証し、情報共有の状況を更新していく「対話」という共同作業

において、文末詞がその対話の特質と深く関わっていることを意味している。言い換えれば、「対話」を念頭においた言語モデルでなければ、文末詞の記述は十分に行えないということである。これまでの文法記述においては、「話し手」、「聞き手」といった談話構成上の概念が文末詞の記述にときおり引き合いに出されることはあったが、「対話」という人間行動の性質を「情報共有の実現」や「立証されていない知識の立証」という形で明示的に定義し、その中で文末詞の機能を記述した研究は上記の二つを除いてはないように思われる。

以上述べてきたように、これらの研究では、文末詞の分析を行うために非常に重要かつ有益な視点が取られている。本稿では、これらのモデルの利点に着目し、「知識状況の提示」と「情報共有のための対話調整」の二つを文末詞の基本的機能とみなし、鹿児島方言の文末詞の分析を行うことにする。また、文構造を以下のような形でとらえて話を進める。すなわち、

## (2) (命題的) 情報 X ( + 文末詞 )

という構造を仮定する。情報 X は文末詞の持つ意味を付与された形で談話に提示され、必要と思われる推論等を経て最終的な発話の意味へと到達すると考えられる。

以下、ガ、ヨの順で分析を進める。

### 3. ガの機能<sup>1</sup>

#### 3.1 先行研究

まず、先行研究におけるガの取り扱いから検討を始めることにしたい。木部(2000: 99-101)は以下の例を挙げて、同じく判断伝達系で「無色透明の伝達」を表す在来文末詞のドとの対比でガを考察しており、その意味を(7)のように

---

<sup>1</sup> 上村(1998: 141)にもガの意味についての記述があるが、「軽く言い張る、同意を求める、余情を込める」という表面的意味の記述がなされているのみである。

定義している。

- (3) アンシ トワ ヤマダサン ジャン ド
- (4) アンシ トワ ヤマダサン ジャン ガ
- (5) モ キチョッド
- (6) モ キチョツガ
- (7) ガは語として「そのこと (=前接する命題) を自明のこととして伝達する」という意味を持つ。言い換えればその話題について相手の意見を聞く必要がないという意味を持つ。

つまり、(3)はヤマダサンを知らない人に教えるとき、(4)はヤマダサンを知っている人が、名前を間違えて言った場合やヤマダサンと気づかなかった場合などヤマダサンという人物を知っていることを前提としているといった区別があると木部は言う。また、同様に(6)は、ヤマダサンが「とっくに来ている、当然来ている、来ていることをあなたは知らなかったのかなど、やはり来ていることを前提とする」という意味で「自明の判断の伝達」と考えられている。(5)については「普通の伝達」と述べられているだけだが、(3)、(4)の説明から考えれば、「(誰かが) もう来ている」とそのことを知らない人に伝えるということになるのだろう。

木部の分析は方言文末詞の意味に談話機能的とらえ方を施そうとしている点が優れているが、本稿の枠組みに照らせば、記述に用いられる概念の定義にやや不明瞭な点があるように思われる。そこで、本稿の立場から木部の主張をとらえなおしてみたい。<sup>2</sup> まず問題となるのは、ドとガが分類される「伝達」という意味カテゴリーである。このカテゴリーは主観的判断系(ド, ガ), 推量系(カイ), 客観的判断系(オ, ヨ)などで構成されるようだが、そもそも対話そのものが基本的に相手の存在を前提とするかぎり、そこには必ず何らかの情報伝達が行われているわけで、意味記述にしる機能記述にしる改めて「伝達」

<sup>2</sup> ただし、木部の記述は老年層のガに関するものであり、若年層のガについてはふれていない。若年層の用法は老年層とそれと多少の異なりがある可能性も否定できない。

というカテゴリーを立てる必要はないと思われる。

一方、本稿の立場からは、「伝達」とは「談話領域への情報の提示，すなわち言語情報が処理される参加者たちの心的領域への情報の書き込み」ととらえることができる。書き込まれた情報は、後接する文末詞の意味を付加した形で受け手に届き、推論など適切な解釈作業を経て文脈に最も適切と思われる意味が得られることになる。つまり、「命題情報X+ガ」という発話からは、「Xが自明のことである」という話し手の知識状態を表示する書き込みが談話領域になされることになると言える。ガ以外の在来形文末詞については、KNコーパスに用例が現れないため推測するしかないが、それぞれの語形が持つ意味は異なっても同じ知的操作を受けるものと思われる。

しかしながら、若年層の用法を見ると、これでもまだガの意味は十分記述できたとは言えない。なぜなら、「自明のこと」の意味が十分に明らかになっていないからである。つまり、文末詞を話者の知識状態を表す（そして談話領域に書き込む）標識とみなすと、「そのことを自明のこととして伝達する（＝談話領域に書き込む）」というガの意味の定義は、ガの伝達の様式についての定義であり、ガのプロトタイプの意味ではないのではないかという疑問が生じる。言い換えれば、なぜ自明のことと感じられるのか、どうして話者は自明のこととしてとらえているのかについては明らかでないままである。文末詞ガの意味を十分に記述するためには、伝達という談話における行為とガそのものの意味を分けて考慮し、さらに「自明のこと」の意味を明示的に示す必要があると思われる。

### 3.2 「自明のこと」の意味

では、以下の例を検討して、「自明のこと」の意味を探ることを試みる。なお、用例は読みやすさを優先させるため基本的に音調記号をつけていない。ただし、昇降調の音調（cf. 木部・久見木1995）が文末詞類と共起するところだけは、たとえば(18)のように「『』」で囲んである。下がり目だけが聞き取れるところでは、(8)のように下がり目だけを記している。また、談話の内容を理

解するのに必要と思われる文脈も、( ) 内に示している。

(8) (前髪を切ってしまうことについて)

- C378 まえがみなくすのゆうきいるよねー  
 B423 あー  
 A343 いるよ ほら (笑)  
 C379 あなたはにあってるからいいわけよ  
 A344 にあってないがー』 こわいんだって

(M18)

(9) (旅行での行く先を探しながら)

- B232 (なが) ながと? わかんない わかんない なが なが  
 C203 ながとー? ねー ながとっておもうよねー あたしもそうおもったけど  
 B234 うん ぼくじょう えーいろいろあるんだー  
 C204 まあなんとかなるがー なんか うわさに  
 B235 あーあった これ たてしなしらかばユースホテルって

(M18)

(10) (旅先での計画を立てながら)

- B239 ひしょち めがみこーもいける なつはぼーとあそび へらぶなぶな  
 づりだって  
 C210 どうかおよげない『けー』 わたしおよぎたいがよー  
 B240 およげるんじゃない?  
 C211 ねー およぐがー  
 A163 どこで みずうみで

(M18)

(11) (クラブの先輩たちのつき合い方について)

- A35 でもさー ××さんと ○○さん (から) かなりたたかされてるよ  
 B35 だって (あれとる) あれは べつだよー だって あのひとたちの  
 どこまでほんきか どこまでうそかわかんないがね

(M12)

以上のように、ガが用いられる形式は次の三通りである。



